

第一章

「信州の学海」

に花開く学園

第一節―個性を重視した教育理念

ユニークな選択コース制の導入

いつも、時代の流れを見つめ、将来を見据えながら、社会の要求、そして学生の要望に応えていく。上田女子短期大学の歴史をひもとくとき、その行間から浮かび上がってくるのは、いつもこの理念である。

個性の時代、選択の時代といわれ、日本の短期大学全体が学生の要望に即した学科づくりを意識しはじめるようになったのは、つい最近のことだ。しかし、上田女子短期大学では、学生一人ひとりの立場に立って学ぶ意識を考えた履修方法が早くから実践されている。

「四年制でも専門学校でも得られない短期大学の良さ、とりわけ、上田女子短期大学で学ぶ意義をどこで学生に見い出させれば良いのか……」

上田女子短期大学の教職員たちは、この問題について、さまざまな角度から取り組んできた。こ

の、きわめて難解な問題の解決案の一つが「コース制」の導入であった。昭和六十一年のことである。

「コース制」。この履修制度は、従来の一学科に一つの履修方法という概念を超えた上田女子短期大学らしい、たいへんユニークな制度なのだ。

たとえば、国文科の学生だからといって、その全員が『源氏物語』を完全に理解することを望んでいるわけではない。国文学の知識をベースにして文章力を身につけたい、書道の世界をのぞいてみたい、とその希望はさまざまである。

幼児教育科の学生も、幼稚園の先生になりたい、保育所の保母になりたい、福祉関係の仕事がしたい、保育を中心とした教養を身につけたい、あるいはピアノの先生になりたい、と目的は一人ひとり違う。

上田女子短期大学では、コース制を導入することにより、このように学生たちの希望する分野が集中的に学べるようにしたのである。

現在、幼児教育科には幼児保育コース、社会福祉コース、教養文化コース、そして音楽コースの四つのコース、国文科には、文学コース、表現コース、書道コースの三つのコースがある。

「コース制」導入への道のり

昭和六十年の夏ごろから、幼児教育科、国文科の両学科とも、「学生に、より意欲的な研究、学習をさせるためには、コース制を導入したほうがいいのではないか」という議論が教授陣の間から、盛んに出るようになっていった。

幼児教育科竹内要教授、国文科中山渡教授はじめ、現場に立つ教員が委員となって、大学の将来計画についてさまざまな角度から検討するという主旨で、六十年十二月に、長期教学将来計画研究委員会（委員長・小松忠志教授ほか九人の委員で構成）が発足した。同委員会は、精力的に会合を開いて討議した結果、幼児教育科にある保育コースと音楽コースのうち音楽コースはそのまま開設し、保育コースを幼児保育コース、社会福祉コース、教養文化コースの三つに細分化して開設し、国文科は文学コース、表現コース、書道コースの三コースを開設するという原案をまとめた。

六十一年四月、委員会は同案を教授会に提案。四、五、六月の三ヵ月にわたって、教授会および委員会、さらに各科会で慎重な審議を行った結果、六月の教授会でコース制の全面導入を正式決定した。

具体的にどういうカリキュラムでコースを実施するか各科会で検討し、委員会で話し合いをかさね、最終決定したのが十二月である。実施されたのは六十二年四月である。

学生の立場からすべてを考えていく上田女子短期大学の新しい特色がひとつふえたことになる。

社会的変動に対応するためにも

昭和四十二年。当時はベビーブームの子供たちが幼稚園に入園するのにも試験があつて、ときには落とされてしまうという時代であつた。当然、幼稚園教諭もひっぱりだこ、という時代である。実際、保育所や児童福祉施設の保育の資格と幼稚園教諭の免許がとれる保育コースだけで、時代の要求を満たすことができたのである。

ところが、五十年代に入つて出生率が低下し、子供の数が少なくなっていくにしたがい、保育や幼稚園教諭の養成は、「量より質の時代だ」という声が聞こえてくるようになる。子供が少なくなつたから、いまいる保育さんたちだけで十分間に合う。新規にたくさん養成する必要はなくなつたのだ。時代は、量より質の高い保育さんを要求しはじめたのである。

五十一年に幼児教育科の一学年の定員が百人から百五十人という長野県下一の規模になつた上田女子短期大学では、まさにそうした社会的な変動にいち早く対応して、たんに資格が取れればいいという短大から、幼児教育のエキスパートを育てる短大へと、コース制を導入することにより、積極的に脱皮をはかつたのである。

幼児教育科の竹内要学科長は、

「ここは、学びの場であり、自己の個性を伸ばし、豊かな人間同士の出会いの場としても適切な環境がある。幼児教育者として、福祉従事者として熱い心を燃やして進む道も、児童文化各般の専門家として独特な道を歩むことも、自主的な選択に任されている。そして、近い将来の望ましい母親となるための着実な目標も好ましいことである。さまざまな目標に対し、それぞれにきめ細かく応えることのできるコースが準備されている」と語る。

熱心な先生方によって実現した、幼児教育科の新しい出発である。

一方、国文科では、新任の国文科教授が地元高校の要望をいち早く取り入れて、コース制に取り組んだ結果、新しいカリキュラムが生まれたといえる。

五十八年に国文科が開設された当初のカリキュラムは、きわめてオーソドックスなものだった。

国文科の学生全員が文学を研究することを目的とした、いわば四年制大学のミニチュア版のようなカリキュラムだった。「新しい短期大学の新しい国文科」を夢みて馳せ参じた新任の国文科教授陣は、このカリキュラムをみて戸惑った。

挨拶まわりをかねて地元の高校へ行くと、「短大の国文科はたくさんある。四年制大学の二分の一のカリキュラムになっているだけではないか。せっかく地元に来た短大だから、もっと地元の

生徒の希望がかなえられるような短大であってほしい」という要望が寄せられた。「生徒の希望がかなえられる短大」とは、いったいどんな短大なのか。教授陣は地元高校へこまめに足を運んだ。

短期大学を目指す学生たちは、四年制大学の学生に比べ、自分が何を勉強したいかというビジョンをより強く明快にもっているといわれる。たとえば、国文学を勉強したいけれど、同時に書道に比重をかけて勉強したい。また、近代文学を中心にして表現力を学び、自分で小説を書いてみたいなど、その目的が具体的なのである。

「書道だけ専門に勉強できる短大はなかなかない。でも、遠くに行くわけにもいかないという学生が私の学校にいるんですが、上田ではもっと書道に力を入れてもらえないでしょうか」「短大を卒業しても、就職試験のときに文章を書く自信がない。文章の書き方も教えてもらえないようなカリキュラムを組んでもらえるとありがたいのですが」。こんな声が、地元の高校の先生や生徒から聞かれたのだ。

入学してきた学生からも、まんべんなく勉強するよりも、目的をもって集中的に勉強したい、という意見が強かった。

「短大という性格上、研究は中心になるけれど、研究だけでいいわけではない。むしろ求められるのは、教養を身につけることです。国文科でいえば、古代から近世に至る古典を読む力を身につけた

い。近代文学では、享受するだけでなく表現力を養って詩や小説も書いてみたい。国語学や国文学を全般的にわたって勉強するカリキュラムでは、高校から入った学生としては堅苦しく、自分たちの必要とするものとは離れてしまう。ベースは日本語・日本文学だが、研究を行うだけでなく、表現力をぐっとつけてもらい、書道をさらに教えてもらおう。こういう高校生の希望を生かすカリキュラムのほうがよいのではないか、という気がしてきました」と、国文科の中山渡学科長は語る。

コースの選択は希望どおり

コース制を導入した結果は、地元の学生をはじめ、父兄、高校の先生からもすこぶる評判がいい。学生自身に目標が定まって意欲的になり、自ら求めていくという態度がみられるようになったことだ。質問もふえた。

なぜコース制は効果的だったのだろうか。大きな要因の一つに、コースを選択する際、すべての学生が希望どおりのコースに入れることがあげられる。コース選定に関する指導としては、入学式のあとの履修届提出時と後期の授業が始まる前に細かくカリキュラムの説明が行われる。コースの選定にあたって実技試験があるのは、入学試験時に行われる幼児教育科の音楽コースだけである。

一年目の前期は学科共通の科目を勉強して、自分の適性や希望を再確認し、後期に入ってからコ

コース制のカリキュラムに沿って勉強することになる。しかも学生にとってうれしいのは、各コースとも人数に制限がないことだ。可能なかぎり自由意思に沿ってコースが選べる。かといって教員は学生の増減によつて変わるわけではない。

「コース制を希望して入学してきたのに、教える側の都合で人数枠を決めたら、コース制をつくつた意味がなくなる」と、教員たちは自分たちの負担が重くなることを覚悟のうえで、学生の希望がすべてかなうような方法を、いまでも実践している。

短大のイメージを専門学校に近づけるのではなく、従来のアカデミックな部分はそのままにして短大のイメージをふくらませる。自由でしなやかな大学像を目指して、上田女子短期大学の試みは始められた。かたちにはまった固定的なカリキュラムに固執するのではなく、学生にとってのよりよいカリキュラムづくりを目指して、努力がつづけられているのである。

コース制で研究テーマが多様化

六十三年度になると、卒業研究を指導する教授たちがいちだんと忙しくなった。コース制が導入され、卒業研究が多様化してきたからである。学生が文学コース、表現コース、書道コースのなかから自由に選択できるため、人数にばらつきがでる。しかし、卒業研究を指導する教授の人数は、

学生数によって変わることはない。たとえば表現コースの場合、卒業研究に文学作品と文学評論を書く。二年生になった四月から指導教員につき、八ヵ月ほどかけて書き上げるのである。

「不自然なところがあつたり、技巧的にはまずいところがありますけど、たつた二年間でよくここまで成長し、こんな小説が書けたものだという作品もあります。まだまだ発表できるほど素晴らしい作品ではないにしても、まあ、ここまでできれば短大生としてはいいほうではないかと思ひます」とある教授は、巢立ちゆく教え子たちの顔つきを思い浮かべながら語る。

「実際、素晴らしい卒業研究があります。今後、そういう卒業研究の数がふえていけば、国文科の層はますます厚くなります。学生の個性を尊重し、自ら積極的に研究する姿勢を重視するといった設立の意義が達成されることになります。卒業研究だけは、とにかく、なんとか実らせたいですね。卒業研究を書くことは、学生にとって、何ものにもかえがたい貴重な経験になることでしょ。その経験は、どんなに年を経ようとも色あせることはないと思ひますね」。この発言も、きめこまかい教育を実現しているからこそ、確信をもって語れるのである。

現代的なカリキュラムがここに

カリキュラムは絶えず見直されている。伝統ある塩田平に生まれた国文科は、創設から四年間、

新しい時代の要請に応え得るようなカリキュラムの見直しをおこなってきた。

六十一年、六十二年にかけてつくられた新カリキュラムは、コース制の導入にもなつて、さらに手直しされた。そしていま、上田女子短期大学国文科のカリキュラムは、現代的な、柔軟なカリキュラムとして一つのスタイルを確立した。

国文科の独自性を訴えるカリキュラムとは、文学コース、表現コース、書道コースというものの特色を生かした新しいカリキュラムである。たとえば表現コースでは、国文科にある表現コースなので、日本語と日本文学について幾つかの必修と選択科目は他のコースと共通して履修し、そのうえにさらに専門的に学習できるようになっている。

すなわち表現コースでは、小説・物語、あるいは詩歌などの表現法を深く追求できるカリキュラムなのである。さらにものの見方や考え方を広げるため、婦人問題論、職業論、人間関係論、女性職業論、生活言語論なども取り入れて表現力を伸ばしていく、というものである。

書道コースでは、当然、教科として隣接する漢文学および古文書学などが加わっている。

現代的なカリキュラムの一つに、六十二年度から取り入れられた「ワープロ実務」がある。当初は国文科を対象としたが、六十三年度からは幼児教育科・国文科共通の選択科目として開講した。

初年度は二十一台からスタートしたが、平成二年度には四十一台に達した。平成三年度は二百十四

定してしまっていたのである。しかし、保育所は厚生省、幼稚園は文部省と管轄官庁が異なるように、それぞれの役割は本質的に異なっている。保育所が託児所から出発しているように、あくまでも児童福祉が目的であって、幼稚園の代わりとしては、やはり限界がある。

幼稚園の多い他の自治体では、幼児教育の研究に力が入れられ、幼児の創造力をいかに伸ばすか、情操をいかに育むかということが、あらゆる角度から進められていた。それにたいして、長野県教育姿勢は、おもに小、中、高の初等・中等教育や実業教育に重点がおかれ、幼児教育においては、未開拓ともいえる状態がつづいていたのである。

このような状況のもとで、長野県の幼児教育のパイオニアとしての自覚に立って歩み出した上田女子短期大学は、教育方針も新たにスタートした。それは、新しい女子教育の理想を追求し、心身ともに健やかな人格をもつて真に社会に貢献できる人間の育成を目指す。幼児教育振興の気運にのっとり、新しい幼児教育の先駆者として、不動の信念と科学的裏付けをもつて教育者の養成を志向する。人間の基本的パーソナリティー形成における幼児教育の重大さを自覚し、その使命遂行は女性に課せられた聖なる任務と受けとり、これに邁進する謙虚にして真正な学生を養成する、というものである。

その基礎づくりを進めるうえで、一つの構想を打ち出していく。それは、「自分たちの短大を県

下の幼児教育のメッカにする」という、いわば大学としての決意表明ともいえるものだった。たんに資格を取得するための教育機関に終わるのではなく、教育県長野の名に恥じない独自の研究を進めていく。幼児教育のおくれをとりもどすのではなく、新しい幼児教育の流れをつくっていく。既成の教育体系にとらわれず、全学が一体となって、さまざまな計画にチャレンジしていく。

信州の学海。いまでも残る数多くの寺社が、信州の教育と文化の中心地だった当時をしのばせる。そうした風土を受け継いで、幼児教育へ情熱を燃やそうではないか……。それはパイオニアだからこそできるのではないか……。

上田女子短期大学は誕生以来、さまざまな試みに挑んできた。それはすべて、幼児教育のメッカを目指すための学生と教職員が一体となった努力の過程にはかならない。

鈴木鳴海学長が、「めぐまれた自然環境のなかで、未来を背負う若人、子供たちを人間性豊かに育てていきたい」と考え、幼児教育の火を新たに点火したからこそ、いまの上田女子短期大学の姿があるのだ。

上田女子短期大学の幼児教育は、いまやすっかり地域に根づき、その実績は各方面から高く評価されている。幼児教育への関心がますます高まっていくなかで、次の時代に向けてどのような幼児教育の在り方を提言できるか、パイオニアとしての真価が問われるのはこれからである。

ユニークな卒業研究

幼児教育のバイオニアを目指す上田女子短期大学では、創意と工天によってユニークな教育を試みている。なかでも卒業研究は、全国の短大のなかでは数少なく珍しいとして注目されている。

第一回卒業生（昭和四十二年度）のときは全員が義務づけられていたわけではなかったが、第二回卒業生から必修になり、義務づけられるようになった。

卒業研究は学生が専門領域について、より深く探究すると同時に、自発的な研究態度や研究方法を学習するために設けられたものである。各科目ごとの講義やクラス別実技などの学習と合わせて、学生自身の研究意欲を基礎としたゼミナール形式の授業が、二年間の教育課程のなかで緻密に行われているものだけに、注目されているのである。

卒業研究は必修科目で二単位。研究のための演習時間は毎週一時間設けられている。学生はその時間を利用して自分のテーマについて研究を深めていく。

テーマは保育領域に関するものが圧倒的に多いが、その具体的テーマは実に多種多彩である。保育領域に関するテーマは、言語、社会、自然、絵画制作、音楽リズム、健康など。そのほか幼児の絵本、童話、童謡、民話、音楽、オペレッタ、舞踊、劇あそび、テレビなどの文化関係。幼児の心理発達、運動能力発達、知能検査、性格検査などの発達・検査関係。

さらに、家庭環境、親子関係、親の教育意識、育児観、しつけなど家庭教育にかかわるものや僻地教育、地域の遊び場などの地域環境を取り上げたテーマ。乳幼児の栄養・保健に関するテーマ。幼児教育史、教育思想、宗教教育といった教育学分野、保母の労働条件、保育施設の構造など経営管理に着眼したものとテーマの分野は幅広く、時代の進展とともに幼児教育を取り巻く問題が多様化してきたことを物語っている。

そのほか最近の傾向では、心身障害児教育や社会福祉関係についての関心の高まりも強い。また、少年非行、同和教育、食品公害などの社会問題に取り組んだものも多くみられる。さらに、人間の脳の研究、手先の不器用、甘えのパーソナリティ、核家族のあり方、父なき社会、といった異色のテーマをねらったものである。

幼児教育の枠組みを固定化せず、柔軟に思考し、自由に発想してテーマを開拓していく学生たちの学習領域は、これからもさらに多様化する方向にある。

この卒業研究は、学生たちの研究活動と教員側の活発な研究的気運を盛り上げていき、のちに「幼児教育研究会」が生まれることになる。

幼児教育科四つのコース

六十二年四月から導入されたコース制によつて、幼児教育科には現在、幼児保育コース、社会福祉コース、教養文化コース、音楽コースの四つのコースがある。

従来、幼稚園教諭と保育所保育を養成する保育コースと、音楽指導者を養成する音楽コースの二つのコースだったが、このうち保育コースに関する分野を幼児保育コースと社会福祉コースに細分化し、あらたに教養文化コースを新設したのである。

社会福祉コースは、社会の進展とともに保育にたいする形態が多様化してきたなかで生まれた。従来型の保育から長時間保育、夜間保育、障害児保育へと保育への期待が様変わりし、なかでも福祉にのぞむ態度や専門性が大きく変わってきた。このような状況のもとに、ただたんに保育の資格を得るだけでなく、さらに焦点を絞ったエキスパートを養成する目的でできたものである。したがって、児童福祉施設や社会福祉施設の保育を目指すものにふさわしいコースなのである。ここでは児童福祉、養護原理などの科目をとおして、福祉にたいする正しい理解を深めるほかに、小児保健や臨床心理学も学習していく。

一方、幼児教育科のなかにあつて目新しいのが教養文化コースだ。教養文化の名のとおり、ここでは職業人の養成にとらわれず、児童文化を核とした社会性豊かな観点を育てることに主眼をお

く。これまで以上に広い視野から幼児教育や家庭生活、社会生活を考えることのできる、創造性豊かな知識と技術を学習しようとするものだ。このために、学習の内容や方法は多彩をきわめている。女性としての教養文化のほかに、児童文化にかかわる絵画、音楽、体育と、専門的な分野にも進めるように自由に設定されている。学生の個性をよりよく伸ばすためにも選択科目の幅が広いのが特色である。

特性を生かす音楽コース

音楽コースは他のコースとは少し事情が異なっている。歴史も古く、志望する学生は入学試験時に選考・決定される。

昭和四十七年四月、「音楽」を上田女子短期大学の特色として打ち出し、幼児教育科の特性を生かしながら、すぐれた音楽指導者を養成する目的で開設された。したがって、開設にあたっての苦労も特筆されるものがある。

開設に先立つ四十六年六月、まず、音楽関係の大学の視察からはじまった。音楽担当の藤沢紫朗助教授と事務局の遠藤憲三事務長の二人は、短大のなかで音楽教育がもつとも進んでいるといわれる千葉の聖徳学園短期大学、静岡の常葉女子短期大学、三重の松阪女子短期大学の三校を視察し

た。このうち松阪女子短期大学で、音楽が専門の藤沢助教授が、大規模な音楽棟に数えきれないほどのピアノと器楽室に山のようにあるオーケストラの楽器を前にして、「驚くほど立派な設備にびつくりした」という。

九月に視察を終え、講師の選定にとりかかった。「東京の桐朋学園に加納悟郎（ピアノ）、古沢浩子（声乐）という素晴らしい先生がいるという。なんとかこのお二人を桐朋学園から派遣してもらえないものか……」と切実な願いを胸に、講師派遣の依頼をする事になった。交渉に鈴木鳴海学長と藤沢助教授が出向いた。秋も深まった十一月だった。新設校に講師を派遣してもらえるかどうか一抹の不安を抱きながらも、大学の実情と将来の構想を懸命に説明した。先生がいなければコースは開講できない。二人の熱意は通じ、快諾を得て両講師を迎えることができた。

第一回生は四人が入学した。派遣された両講師と音楽担当のスタッフが一体となって音楽コースをスタートさせた。五十二年度から教育内容の充実と資質を明確にするため、コース内を器楽専攻と声乐専攻に分けた。

音楽コースでは、幼児教育をベースに、音楽にたいする深い理解と高度な技術を身につけることを目標としており、音楽技術を追求し音楽専門家を養成するという、世にいう音楽科とは少し異なっている。音楽が好きになるか嫌いになるか、大切なものになるか苦痛なものになるかを決定する

大きな要素は、小さい子供の心理面、思考面での能力を全部踏まえ、音楽という素晴らしい世界に子供をいかに導くかということである。

音楽的にすぐれた能力、技術をもっている人でも、必ずしも三、四歳の子供に音楽の素晴らしさを教えることができるとは限らない。その点このコースの卒業生は、もともと幼児教育科の学生だから、子供の心理面や生活傾向などを理解し、子供の扱いにも慣れている。そのうえでピアノや音楽の素晴らしさを教えられる。つまり、四年制の専門の音楽科では決して学ぶことのできない教育内容をここでは学ぶことができるのである。しかも、少人数による余裕あるカリキュラムのなかで、器楽と声楽の分野で活躍している強力な教授陣による個人レッスン中心の授業が行われるのだ。卒業生の多くは、ピアノ教師、幼稚園教諭として幅広く活躍している。さらに卒業後も研究生として研鑽をつみ技術の向上をはかる学生も多い。

「歌のおばさん」こと松田トシさんを副学長に

音楽コースを世に強くアピールした出来事がある。四十八年のことである。

長野県出身で「歌のおばさん」として知られている松田トシさんを、副学長兼特別講師として迎えたことだ。松田女史と北野理事長はかねてから昵懇の間柄であった。北野理事長は、「上田に來

ていただけませんか』と依頼したところ、『私は同じ長野県の出身。あまり長くはできないけど、郷土のためにお手伝いしましょう』といつてくれてねえ』と当時を振り返って語った。

松田女史が副学長で音楽を教えてくれるという噂は、長野県下はもとより全国に広まっていた。その効果は応募者数の増加となってあらわれた。北野理事長がかねがね語るように、「すべては人材の時代。教育とでも同じことです」が、みごとに証明されたわけである。

松田副学長の在任期間は三年間という短い期間であつたが、この間、上田女子短期大学の名声は一挙に高まり、学生の出身地も長野県はもとより、新潟県をはじめ山形県、北海道、沖縄と、いまなお全国的な広がりを見せている。

第三節——隣接地に理想の附属幼稚園

真の幼児教育振興を目指して

昭和五十三年四月、上田女子短期大学附属幼稚園が開園した。

附属幼稚園設立に先立ち、関克彦教授を委員長とする附属幼稚園設置委員会が設けられ、設立準備から園舎の設計まであたった。設計にあたってもっとも重視されたことは、教育実習にあたる学生たちが、いつも幼児に接触できるような場となるための配慮だった。

五十二年七月、設立趣意書が長野県に提出された。そのなかで、附属幼稚園の教育方針を次のように掲げている。

一、一人ひとりを伸ばす

一、自然な保育プログラム

一、適正なクラス編成と定員

一、横と縦の人のかわりを大切に

一、子供に最適の園舎づくり

一、広場と楽園の園庭づくり

一、すぐれた自然環境での教育

一、父母と共にのぞましい幼児教育を打ち立てる

十月に入り地鎮祭を終えると同時に、昼夜兼行の建設工事がはじまった。十二月に県の審議委員会で認可の可否が審議されることになっているのだが、それまでに建設が八〇パーセント以上進んでいなければ審議の対象にならない。間に合わなければ開園は一年遅れになってしまう。工事は急ピッチで進められた。

当時、大学の周囲に民家はほとんどなかったため、建設現場は夜半まで戦場のような騒ぎだった。まさに夜を日についての突貫工事だった。

十二月、鉄骨平屋建ての一部二階建ての園舎は、目標を上回る九〇パーセントまで進んだ。工事と並行して園児の募集も開始された。事務局では塩田地区をはじめ千曲川以南の地区の幼児の名簿をつくり、教員と事務職員が一体となって一軒一軒歩き、園児募集に回った。

五十三年二月、附属幼稚園の設置が認可された。開園に向けて、教材、教具、遊戯具の購入も進められた。「大学の附属幼稚園としてふさわしいものでなければならぬ」という北野理事長の意向を受けて、とくに音楽関係の設備には気を配り、周辺の幼稚園にはオルガンくらいしかなかった当時、六室の全保育室にピアノやエレクトーンが配置された。

机、椅子をはじめ、すべり台、ブランコ、低鉄棒、登り棒、遊戯室用のトランポリンなども、すべて良質のものがそろえられた。各部屋は採光用の広い窓をつけ、音響効果を十分考えた遊戯室など、さまざまな工夫をこらした園舎だった。

開園に先立ち三月一日、入園予定の園児たちの一日入園が行われた。小雪が舞う悪天候のなか、母親に手を引かれた四十人余りの子供がやってきた。そのうちの一人が運動場をながめまわして、「あれ、キリンさんのすべり台がないよ」というのである。園児募集に使ったパンフレットの園舎完成予想図に描かれていたキリンの形をしたすべり台のことだった。

それを聞いた丸山正樹事務局長は、「これはいけない。子供の夢を破ってはならない」と、直ちに近くの建具商都築正明さんに相談した。だが、都築さんは材料や図柄からみて、とてもつくれる自信がないという。それを無理やり拝み倒して承知してもらった。

入園式前日になっても都築さんは作りにこない。「とても明日までには無理だ」と事務室では、

ほとんどあきらめて開園の日を迎えた。ところが、子供たちが、朝、登園したときには、キリンのすべり台は立派に完成していた。都築さんは入園式の朝、暗いうちから奥さんと二人でとりつけ、間に合わせてくれたのだった。

五十三年四月一日、園長鈴木鳴海（学長兼務）、副園長土屋吉太郎ほかスタッフ四名で開園、同月七日、第一回入園式が行われた。新入園児は四十四人だった。

学級名は、すみれ組（三歳児）、ばら組（四歳児）、まつ組（五歳児）と名づけられた。

初年度は少ない入園者でスタートしたが、二年目は百十六人と急増。そして三年目の五十五年度には、定員充足の目標を一年早く達成し、予定の六学級編成となった。

附属幼稚園では開園以来、教育内容について随時、短大の教授陣の協力と助言を得て質的充実がはかられており、また、家族の協力を得て父と母の文集『虹』を発行し、現在までに第十五号を数えている。

教育・保育実習とその指導

豊かな自然のなかで、子供たちの豊かな創造力を伸ばす。子供たちとの触れ合いのなかで、教育の在り方を見いだしていく。上田女子短期大学が目指す幼児教育の理想が、その附属幼稚園で実施

されるようになってから十五年になる。

上田女子短期大学幼児教育科では、卒業と同時に幼稚園教諭二種免許と保育所や児童福祉施設の保育資格が取得できるので、そのための教育・保育実習を履修しなければならない。したがって、実習は必修である。

実習は一年次に幼稚園、保育所、社会福祉施設での見学実習・観察実習を中心に、学内での特別講義と関係教科の学習。二年次で幼稚園、保育所、社会福祉施設でそれぞれ決められた実習日数を、受け入れ先の指導者に付いて行われる。

教育実習は附属幼稚園ができるまでは、上田市内の学校法人ふじ学園「大屋幼稚園」と県下の各幼稚園や学生の出身地の幼稚園にもお願いし、たいへんな協力を得てきたが、現在では附属幼稚園においても多くの学生が実習指導を受けられるようになった。

この大屋幼稚園とは開学以来、教育内容においても緊密な協力関係にある。同園では本学の教育方針に沿った教育実習が行われているので、幼児教育上これ以上の効果はない。なお、大屋幼稚園の園長は上田女子短期大学の講師も兼ねている。

ところでこの大屋幼稚園については、忘れることのできないことがある。附属幼稚園設立の折、設立認可について一部上田市内の幼稚園から設立反対の動きがあった。この動きにたいしてふじ学

園安藤信義理事長は、新しい幼稚園の設置に賛同し、逆に附属幼稚園設置の促進をはたらきかけたほどだった。その後両園は姉妹園として地域教育の発展に協力し合い、その効果を上げている。

保育所での保育実習の受け入れ先は、県内各市町村に保育所が普及しているので、学生が出身地の保育所でそれぞれ内諾を得てのち、大学から正式に依頼して実習を行うようにしている。また、地元の塩田を中心とする上田市の保育所では、地元出身以外の学生の実習も受け入れてもらえるので、遠隔地の学生にとって、たいへんありがたい存在となっている。

さらに、社会福祉施設での保育実習は、長野県下の保母養成校が保母養成協議会を組織して社会福祉施設での実習計画をまとめ、施設側と調整をしながら実習を行っている。

これらの実習指導には、教員で組織する実習委員会が当たるほか、全学教員の協力を得て行われている。実習委員会では五十年度に、上田女子短期大学の実習の実情に即したガイドブックを作成し、学生はこれにもとづいて指導を受けている。

貴重な体験は教育実習から

さて、念願の附属幼稚園における教育実習が五十五年度からはじまった。幼稚園側にとっても、いうまでもなく初めての経験である。二百人の学生が六学級に分かれて、保育の見学、研究会、さ

らに教育実習が行われ、成果を収めた。

当時の教諭が「実習生がどんどん入ってくるから、その受け入れがたいへんでした。でも、実習生と話し合っているうちに、だんだんこちらも、ものが見えてくる感じがしたりもしました。何かあればみんなで真ん中の部屋へ集まって、よく話し合いをして、一緒にものごとにあたったものです」。実習するほうも受けるほうも、いわば手さぐりの状態からはじまったわけである。

この年の秋、幼稚園の行事として、「野焼き」、「焼きいもパーティー」が初めて行われた。野焼きは、大学の裏山でとれる良質の粘土で園児がいろいろなものをつくり、日陰干しにしておいたものを、裏山の畑に大きい穴を掘って焼くのだ。燃料も裏山で園児たちが何日もかかって集めた枯枝を使う。これらはすべて自分の手でやらなければならないため、この野焼きは、子供たちにとっては貴重な体験になり、以降、毎年つづけられることになった。一方、実習生にとっても貴重な体験をする場の一つになった。たとえば、裏山を歩きながら、子供がなにげなくこんなことをいう。

「先生、この土、お庭の土と違うよ。ほら、さわってみて。やわらかいでしょ。これは木の下のお土なんだよ。色も違うし、お庭の土はかたくて、ざらざらしてるね。もしかしたら、これ、肥料かもしれない」。子供たちは、いつも、「ふしぎだな?」「なんだろう?」「やってみたいな」と、好奇心のかたまりのように探索し、目を輝かせる。次々と新しいことにぶつかり、挑戦し、発見してい

く。その発見を大人や友だちに認められることで、ますます楽しくなっていく。

学生たちは、子供たちの創造力を目の当たりにして驚く。自分はどう対処したらいいのか考える。子供たちが前面に出してくる楽しさのなかに、何を学んでどのように子供と接していくかを模索する。そして、それが幼児教育の第一歩であることを、子供たちとのかかわりのなかで実感していく。教育実習がたんに単位取得のためのものでないことを、学生たちはあらためて知るのである。さらに五十六年、園児たちにとって貴重な体験学習が行われた。「りんご狩り」である。りんごを直接木からもぎとる経験させたのである。自分の手でもぎとり、その場で食べ、一人一家庭に持ち帰り、家族全員で食べる。そしてそれを絵に描くという体験学習で、これは家族からたいへん喜ばれている。

昭和五十年代の中頃から全国的に幼児の数が減りはじめ、入園金の引き下げや長時間保育など本質的でない問題が新聞紙上をにぎわせていた。こうしたなかでも、上田女子短期大学附属幼稚園は、前年にもまして多くの希望者があつた。それは、園児と先生が肌で触れ合うことのできる貴重な体験学習の数々、豊富な遊具を使った教育内容の充実が評価を高めていったことにほかならない。幼稚園が経営上立派に存続していくのは、やはり教育の質的な充実、向上以外にはないと、決意を新たにしたのである。

第四節——教育成果挙げる三つの行事

菅平ゼミ

幼児教育科の一年生と教員全員が、自然のなかで親睦を深め、教育、人生、社会、自然問題を考え、明日の歩みに役立てるのが、菅平ゼミである。

大自然のなかで集団生活を体験しながら幼児教育の指導法を研究・習得することのゼミナール合宿は、四月の体育デー、五月の美術デーとともに、全員参加による上田女子短期大学の三つの行事のうちの一つである。一泊二日の日程で、分科会単位でゼミ、野外学習、自然研究、保育技術指導、研究発表のほか、ハイキング、夜はキャンプファイアーを囲んで、クラスの寸劇を披露するなど、菅平ならではのゼミナールである。

菅平は長野県東部、上信越高原国立公園内に広がる高原である。夏はキャンプ、冬はスキーのメッカになり、高原キャベツの産地、大学ラグビーの合宿地としても知られる。上田女子短期大学で

は自然にめぐまれたこの菅平で、毎年、夏期ゼミナールを行っている。この夏期ゼミは、昭和四十四年七月二十五日、一回目の開催場所が菅平高原だったため、以降、菅平ゼミと呼ばれる。

保育技術指導はだいたい次のような分科会に分かれて行われている。①いたどり笛製作、②自然の中で音探し、③リズム遊び、④折紙遊び、⑤表現遊び、⑥タオルおじさん。午後は全体会が行われ、各分科会の代表が発表し、講評と続く。

保育技術指導の具体例として、いたどり笛の作り方をあげてみよう。いたどりの茎を斜めに切り、切り口に少しキズを入れて葦の葉の小片を差し込む。口にくわえて吹くと、いろいろな音色が出てくる。自然との直接体験が少ない現代の学生に、そんな自然の中の遊び方を工夫させる。「自然の中の製作」というテーマの保育技術指導だ。

菅平ゼミの実行委員長を務める幼児教育科学科長竹内要教授によると、「いまの学生たち自身、われわれ教師と青天井の下で話をしたり、一緒にものをつくったりする機会が少なくなっているで、学生たちにとっても、この野外学習は貴重な体験になっている」と力説する。

菅平ゼミは昭和六十三年度から九月末の後期授業の当初に変更された。「この変更で菅平ゼミに新たな意味合いが加わった」と竹内教授はいう。従来の七月末の場合だと、大学生活の様子が分かりかけてきたものの、まだ高校生の面影が残っている状態にあった。夏休みに自分の自由にまかさ

れる生活時間を経験したあとは自覚が出てくるため、自分の選んだコースを再確認し、正面から取り組みもうとするスタート台として位置づけられるようになった。そのような状況のなかで行われる菅平ゼミは、学生たちに幼児教育者としての意識を刺激する意味をもつようになったといってもよい。

プログラムや実施時期などについては今後もさらに見直し、検討が加えられていく予定だ。ただ、菅平ゼミの基本的なねらいは、やはり学生同士が、学生と教師と一緒に寝起きし、触れ合いをすること。そのなかから豊かな人間性や創造力が育っていく。そんな菅平ゼミのよさは、いつまでも大切に守っていききたい。これが全教員の願いである。

美術デー

菅平ゼミが生活のなかで創造性を養うものであるとするなら、美術とのかかわりのなかで新しい創造力の発見を促すのが美術デーである。

上田女子短期大学は創立のとき、その教育内容に特色をもたせるため、美術を音楽、体育とともに幼児教育の三本柱に位置づけた。昭和四十八年、美術デーが林幸四郎教授の提案によってはじめられた。

信州はまさに自然の宝庫である。行くところ事欠かず、すべてが教材になる。

幼児教育科の一、二年生と教職員が、志賀高原、日本民俗資料館、礪山美術館や北野美術館、信濃美術館などに出かけ、美術作品を鑑賞し、美術館周辺の風景をスケッチする。特徴はクレヨンを使つてのスケッチだ。これは、幼稚園や保育所で子供にクレヨンを使つて絵を描かせるための実技学習だ。学生にとつて、クレヨンを使うなど幼稚園時代以来の体験だが、絵画担当の高木秀世講師によれば、「郷愁のようなものを感じたり、あらためて興味を抱いたり感動する学生が多い」という。

スケッチした絵の全作品は学内に展示される。この展示も絵画教育の一つだ。学生は一時はいやがる。自分の絵が下手だと思つてゐるからだ。新入生にアンケートをとつてみると、七割くらいは描くことが嫌いだという。

しかし、絵を描くことが好きになれることこそ、将来、子供に絵を教える者の要諦なのだ。そのための展示なのである。指導する側が、絵に技術の違いで上手下手があると考えていると子供もそう思い、下手な子はますます嫌いになつてしまふ。絵は個性の違いが表れるので、指導するときには絵を上手下手で判断してはいけないのだ。卒業するころには、「おもしろい、好きになつた」と答える学生が圧倒的に多くなるという。

豊かな情操をそなえた女性を育成する。上田女子短期大学の建学の理念の中で、美術デーの果たす役割は大きい。

体育デー

体育行事は身体の鍛練をはかり、レクリエーション活動を通じ、学生同士および教師間のコミュニケーションの場として欠かせない。開学以来、「美術デー・体育デー」の名称で、美術と体育行事が行われてきたが、昭和五十一年度から美術デーと体育デーを切り離し、体育デー本来の目的を充実させるため、二日間の日程を組んで行われるようになった。過去のおもな内容はバレーボールとソフトボールのクラスマッチ、オリエンテーリングである。これには全教職員も参加する。

六十三年度から従来のオリエンテーリングに代わり、犬飼己紀子助教授の立案による企画「ウォークラリー」が、全校あげて行われた。オリエンテーリングがスピードとタイム、得点を要求する競技に対し、ウォークラリーは、個人競技になりがちな部分を、社会体育という観点から、人間同士の触れ合い、自然との触れ合いをもっと深めようとする競技である。競技の方法は、指定されたコースを所要所の案内図だけを頼りに、途中のチェックポイントで出される課題問題を解きながらゴールまで歩き、所要時間と回答の正確さを競うもので、距離はおよそ六キロ。グループ単位で

参加する。

その課題問題が実にユニークである。たとえば、神社にあるチェックポイントでは、「境内にある大木の周囲はどれくらいでしょう」、また、別の神社では「鳥居の真下で俳句をひとひねり」、お寺に寄れば「どんな重要文化財がありますか」といった具合である。

文化財の多い塩田平のなかに生まれ育った地元の学生から、「新しい発見をした」という声が聞かれたほど、豊かな自然に親しみながら歩く。

このように、体育デーで共同意識を養い、美術デーで情操の大切さを知り、そして菅平ゼミで人間性を育む。春から秋口にかけての一連の行事を体験しながら、学生たちは、上田女子短期大学の教育の理想を身につけていく。

第五節——「音楽の会」と「クリエイティブダンス」

教育成果発表の場を地域で

上田女子短期大学では、音楽・美術・体育を幼児教育の三本柱とする教育目標を掲げ、音楽部門・体育部門の内容の充実、向上にも力を注いでいる。その成果は、開学初期は音楽会、校内創作舞踊発表会、文化祭、文化フェスティバルなどで発表されていたが、やがてそれは、「音楽と創作舞踊の会」、さらに「音楽の会」と「クリエイティブダンス」の二つに分離されて発展していった。音楽会は音楽をとおして地域文化の向上に貢献したいとする、いわば、音楽の地域活動である。

第一回音楽会は、昭和四十八年十一月十七日、上田市民会館で行われた。

前年四月に音楽コースが開設されて以来、教授陣の充実によつて学生の層にも厚みが増し、音楽への高まりにも目を見張らせるものがあつた。その機をとらえた藤沢紫朗助教授が、前年、「音楽会」を上田市民会館で開催することを教授会に提案していたのが実現したものである。実現の背景

には、上田女子短期大学の誕生を祝って、新しい学校づくりに全校中が燃えていたことも大きな原動力となっていた。

この催しは、音楽教育を通じ周辺地域の音楽文化の普及・向上を目指すことから、学校行事として、学生自治会も組織的に協力して行われた。

プログラムからおもなものを拾ってみると、一年生全員による女声合唱にはじまり、二年生によるピアノ独奏とソプラノ独唱、音楽コース専攻の一、二年生による女声複二重唱、音楽担当教員のソプラノ独唱とピアノ独奏、創作舞踊部員の舞踊とつづく。

四十九年の第二回から「音楽と創作舞踊の会」と改称され、五十年の第三回から開催目的はさらに明確になっていく。それは、音楽と舞踊を公の場所で発表する機会を作ることによって、学生により意欲を起こさせ、さらなる努力と研究を高めさせ、なおいつそうの質的向上を目指す、というものである。

この年、さらに、過去の実績に加え、画期的な試みがなされた。それは、松田トシ副学長がかねてから所有しているインドネシアの民族楽器アングロンの演奏を組み入れたプログラムであった。このインドネシア民族楽器アングロンの演奏が日本で公にされるのは初めてとあって、地元新聞にぎわすほどの盛大な発表会となった。構成も第一部・音楽、第二部に創作オペレッタが加わり、

第三部・創作舞踊のかたちに改められ、以後このプログラムは定着した。

運営も組織化された。計画・原案作成に、音楽部門は藤沢紫朗教授と北村恵子、兎束淑美の両講師の三人、創作舞踊は飯田正江講師の合わせて四人があたるほか、「音楽と創作舞踊の会実行委員会」が組織され、多くの教職員が委員として参加した。

翌年の第四回は藤沢教授の退職により、代わって関口信雄講師が迎えられた。

五十二年の第五回から学生も積極的に運営に参加するようになった。教職員による実行委員会に加えて、学生の委員会組織ができたのである。ここに文字どおり全学あげての開催となったのである。また、この年からピアノ連弾に出演する保育コースの一、二年生の中から二人を選考するオーディションが行われるようになった。このオーディションに向けて練習に励む学生の熱意によって、参加意識はさらに高まった。オーディションは現在も続けられている。

第六回から、保育実習でお世話になっている、ひもろ木園と月影寮などの施設の寮生を招待して、たいへん喜ばれた。

昭和五十六年。この年開催の第九回から、発表会の形式が大幅に変わった。開学以来、音楽教育と舞踊教育の内容充実と地域の芸術文化の普及・向上に務めてきたこの催しは、音楽部門と創作舞踊部門を分離し、音楽部門を「音楽の会」、創作舞踊部門を「クリエイティブダンス」と名称も新

たにして開催することにしたのである。理由の一つは、出演する学生の増加と内容の充実度もあって、発表時間があまりにも長くなってきたことである。観客である地域の人びとや学生にとって、初めから終わりまでつづけて見るのが大変だというのだ。

一方、音楽・創作オペレッタ・創作舞踊の各部門ともに学生が十分力をつけてきたので、それぞれが独立して発表すれば、さらに教育効果が期待されるのではないか、というものだった。

プログラムは「第九回・音楽の会」と改められた。第一部・コンサート、第二部・創作オペレッタとして。

上田の秋を彩るコンサート

「音楽の会」第一部は約一時間におよぶコンサートである。その目的は、音楽関係の授業を通して身につけた表現力、演奏技術を発表すること、また、この音楽体験を通し、大学生として、ひとりの女性としての感情を磨くことを目指している。

第九回「音楽の会」は「明日がとおい思い出になる日も……」と一年生全員による校歌で開幕した。続いて音楽選択二年生の合唱、保育コース二年生のピアノ連弾、音楽コース二年生のピアノ独奏、音楽コース研究生の独唱、音楽コース全員の音楽アンサンブルと盛り沢山のプログラムが組ま

れ、このかたちはその後も続けられてきた。

上田女子短期大学の看板として音楽教育に力を注ぎ、つねにそのレベルを維持し続けてきたその証明が、毎年行われたこのコンサート。上田を美しい楽の音で綴る秋の風物詩となっていた。

創造性を伸ばす創作オペレッタ

「音楽の会」の第二部で取り入れられている創作オペレッタは、幼児教育者を目指す学生にとって、豊かな自己表現能力を身につけさせるためには欠かせない学習の一つだ。カリキュラムでは「音楽リズムⅠ」で、五十年から導入されている。

担当教員の北村恵子講師は、従来、保育現場で行われていたオペレッタ活動に疑問を感じていた。そのオペレッタの方法とは、既成のオペレッタの作品を毎日子供たちに練習させる。ところが子供たちは、発表の間近になっても仕上がらず、逆に疲れていく。結局、発表会は、保育者は見せることに満足し、父母も自己満足に終わってしまう。これでは子供不在の発表会ではないか。無理が起こるのは、既成のものに合わせようとするからではないのか。そこで、創作オペレッタを思いついたのである。

幼児たちが日常生活のなかで興味や関心をもったこと、感動した出来事をみつけてテーマからス

トリーまでつくり、表現遊び、言葉遊びをさせながら発展させていけば、無理なく楽しい活動になるはずだ。これを授業に取り入れることはできないか、という発想だった。県内の大学でも授業として取り入れたのは初めてのこと、全国でも活動しているところは、まだ少なかった。

第九回「音楽の会」第二部で発表された創作オペレッタの出しものは「ピーターパン」「オニの子ブン」であった。学生が演じる笑いあり涙ありの好演に、幼児から大人まで会場いっぱいにつめかけた観衆は、楽しいひとときを満喫した。

いま、義務教育以上の学校で行われている音楽教育では、創造的音楽学習が注目されている。自由な自己表現活動をおして創造性を伸長させることを目指した音楽指導法である。勉強や技術習得のためだけではなく、音楽の原点を見直そうというものである。この創造的音楽学習は上田女子短期大学の創作オペレッタの指導法と、とてもよく似ている。すなわち、上田女子短期大学が目指してきた音楽教育の理想が、広く義務教育以上の音楽教育にも求められるようになってきたのである。

新しい舞踊文化をつくるクリエイティブダンス

「音楽と創作舞踊の会」から分離して名称も新たに「クリエイティブダンス」となったの第一回発

表会は、昭和五十六年七月十八日、上田市民会館で行われ、以降、毎年、七月に行われてきた。

この公演にあたり当時の鈴木鳴海学長は、「多くの文化は伝承的性格をもっていますが、創作舞踊はこの軌道を乗り越えて新しい舞踊文化を創りつつあります。もろもろの現象のなかの美に感動し、これを空間に自由に表現する芸術であります。この創造的な表現に、私たちは改めて未だ経験しなかった美に、一つの、しかもフレッシュな共鳴を覚えます」との挨拶文をプログラムに寄せている。

テーマを決めることから、動き、伴奏、衣装、照明と、すべて学生たちの手づくりである。発表近くになると、幼児教育科の学生で体育館はもちろん、学校中が練習の場と化す。飛び、跳ね、体をくねらせ、床に寝転び、各々のテーマを表現しようとしている。

発表会には全員が出られるというものではない。まず学内発表会で数グループが選ばれる。選考に洩れたグループは裏方にまわり、照明や音楽、アナウンスをつとめることになる。せつかく一生懸命練習しても自分たちの作品を披露できなければ……と思えば思うほど学生たちの熱は上がる一方なのだ。

第一回のプログラムは、第一部「千羽鶴、卑弥呼、けんか（上田市立中塩田小学校四年四組）、ニューヨーク、如月、反抗期、梅雨（上田東高校）、万里の長城」、第二部は「闘牛士、鐘楼、THE SUN

SHINE（上田千曲高校舞踊同好会）、能面、中国^{オウゴ}旅情、睡蓮、ダダ、FLY（創作舞踊部）」と盛大に行われた。

クリエイティブダンスの発表会には、周辺の幼稚園から高校まで、創作舞踊活動に力を入れている学校から賛助出演してもらっている。これは、学校の中だけでなく、多くの人たちにも参加していただき、創作舞踊を地域に広めていきたいという趣旨によるものだ。

これまで賛助出演した学校は、上田千曲高校、上田染谷丘高校、上田東高校、上田第三中学校、上田第四中学校、松本盲学校、上田東小学校、中塩田小学校、神科小学校、本学附属幼稚園であり、このほか本学卒業生有志の出演もあった。

こうした交流をとおして地域との連帯、地域に根づいた大学を目指し、開学以来、上田女子短期大学が掲げてきた目標を実現していくうえで、創作舞踊は大きな役割を果たしてきた。

担当教員飯田正江助教授は「開学以来、学生とともに積み重ねてきた舞踊を振り返ると、テーマによりその時代の特色が出て時の流れを感じます。また、五十四年当時としては珍しいシンセサイザーを導入したり、常に新しい舞踊を求めてきました」と、熱っぽく語る。

地域の保育現場に立った卒業生たちが、幼児たちに創作舞踊を指導しながら、創造力の種をまき、芽を育て、花開かせる。上田女子短期大学が地域の幼児教育の中心、文化の中心を目指すなか

で、この創作舞踊はすっかり定着した。

ニューイヤークンサート

昭和六十二年のコース制導入により「音楽の会」と「クリエイティブダンス」は、上田女子短期大学開学以来十八年間の幕を閉じることになった。そして「音楽の会」は、音楽コース、同卒業生、二年生音楽選択者、一・二年から選ばれたピアノ連弾で組まれた「ニューイヤークンサート」として、平成三年一月二十日、上田市文化会館ホールで新たに出発した。本格的な衣装をまとい、独唱、ピアノ独奏など芸術性の香り高いコンサートとなり、二回目以降も大盛況であった。

「創作オペレッタ」は、学科必修であった音楽リズムが選択となり、新たに幼児の音楽活動の発表というかたちを明確にし、学生のオペレッタ、合唱、合奏など幅を広げ、附属幼稚園児を招いて校内で発表会を行い、かわいい声援を得ている。

「クリエイティブダンス」も、授業が学科必修から選択となり、これまでのような大がかりな公演は不可能となった。したがって、学内発表会を継続していくことになり、平成四年で二三回目を終了した。

第六節——上田女子短期大学の諸研究活動

研究業績発表の場『紀要』発行

本学教員の研究業績発表の場として昭和四十六年、『紀要』第一号が発行された。

昭和四十八年に上田女子短期大学となつてのち、翌四十九年に第二号の発行をみたが、その後諸般の事情からしばらく休刊した期間はあつたものの、五十九年には創立十周年記念号（通巻七号）の発行を機に、以降、毎年発行している。

『紀要』は全国の大学、短大、研究機関五百余カ所と交換を行っているので発行部数も多く、附属図書館に目録登載のうえ保管し、また執筆論文は、『全国短大紀要論文索引（日本図書センター）』などに、分野別にタイトルが掲載されている。

『幼児教育研究』から『卒業研究集』へ

さきに、全国の短大のなかでも珍しいといわれる卒業研究をみてきたが、その卒業研究と歩をそろえて「幼児教育研究会」が誕生している。幼児教育について専門的に取り組んでいく幼児教育研究会は、教員の卒業研究の指導体制の確立のあらわれとしてできた研究会である。この研究会の設立は大学創立の翌年の昭和四十三年と古く、いわば、幼児教育科の歴史とともに歩み、学生の卒業研究活動の盛り上がり大きな役割を果たした。

幼児教育研究会は、教員、卒業生、学生、その他の賛同者で組織されていた。おもな事業のうちの一つは、教員の論文と学生の卒業研究の中から数編を選んで全文を掲載する機関誌『幼児教育研究』の発行（年一回年度末）である。同誌は六十二年度までに第二十三集を数えた。

一方、学生を主体とした研究活動から発展させて、そこに卒業生の研究もまじえて、学内で一つのまとまりがつき次第、外部へも呼びかけて横の連絡をとるという将来展望をもっていた。このうち、卒業生と外部の賛同者に呼びかけての研究活動は、五十年度に設置された児童文化研究所が肩代わりすることになり、幼児教育研究会は発展的に解消した。そして『幼児教育研究』はその後、卒研指導委員会の手で編集が行われることになり、六十三年度からは『卒業研究集』と改題され今日に継承されている。

児童文化研究所

現在、教育・文化の領域でユニークな活動を展開している研究会組織に「児童文化研究所」があるが、これは昭和五十年に、大学の附属研究機関として設置されたものである。所長は鈴木鳴海学長があたり、全教員が委員を務めた。この研究所は従来、幼児に関する研究を行っていた幼児教育研究会とは別に、児童文化についてさらに基礎的かつ広範にわたる研究活動を目指して設立されたものである。すなわち、児童の生活実態について研究を行うと同時に、児童文化への参与の仕方と児童のパーソナリティーの育成過程を把握し、幼児教育の資とするというもので、子供たちの世界を、生活、文化、教育課程の三つの軸でとらえ、さまざまな角度から研究し、幼児教育の在り方を探っていくというものである。国文科が開設されてからは、児童文学などを専門とする教員の参画を得て、活動領域はさらに広がった。

児童文化研究所の設置は四十八年から準備が進められてきた。発足準備期の五十年三月には『上田盆地の民話』が上田女子短期大学の出版事業として刊行されている。同書は、四十九年度の卒業生が卒業研究で採集してきた民話をまとめ、塩入秀敏講師が編集・解説し、林幸四郎教授が挿絵を描いたものである。

発足三年目の五十三年六月一日、児童文化研究所は規定を設け、本格的な活動を開始する。その

業務として、①児童の生活、文化に関する調査研究、②資料の収集と整理、③児童文化に関する著書・資料集および『所報』などの刊行、④公開の研究会の開催などである。

このうちもつとも重点が置かれたのが公開の研究会「児童文化研究集会」で、五十三年から今日にいたるまで毎年開催されている。第一回児童文化研究集会は、五十三年八月十四日、上田女子短期大学を会場として行われ、県外からの宿泊組もあつて盛況をきわめた。

第一回児童文化研究集会の記念講演は、三沢光則長野県中央児童相談所所長によつて行われた。

テーマは「今日の幼児をめぐる諸問題」。長年の児童相談の経験をつまえたユーモアあふれた講演で、午後は三つの分科会が開かれた。第一分科会は本学元教授の溝上泰子氏による「教育の原理は自己自身」、第二分科会は関克彦教授の「保育現場と大学の連繋の必要性」、第三分科会は須永淑助教授の「遊びの本質と保育活動」で、それぞれ熱心な討議が繰り広げられた。参加者は百三十七人と、予想を上回る盛況ぶりだった。

児童文化研究集会の参加者の中心は在学生と卒業生だが、地域の幼稚園・保育所・社会福祉施設の関係者のほか、児童文化に関心をもつ一般市民の参加もあり、年を追つて参加者はふえ、多いときは三百人近くを数え、研究会としては質量ともに定評がある。また、在学生にとつては学内にいながら地域の人と勉強できるよい実習・交流の場であり、卒業生にとつては実践活動の発表の場と

なっている。

第一回から第五回までは児童文化研究所と同窓会の共催で行われ、第六回から第八回まで同窓会は後援団体として参加の呼びかけ、開催準備、当日の進行などに協力してきた。第九回からは児童文化研究所の単独事業として開催し、名称も児童文化研究大会と変わった。

この児童文化研究大会の特徴は、児童文化のさまざまな領域をカバーするため、第一回以来、分科会の活動に力を入れていることだ。毎回、二つから三つの分科会が設けられ、幼稚園や保育所など保育現場での活動発表にあてられ、その内容はおもにボランティア活動、児童に関する地域活動である。最近の傾向として、地域の児童文化活動を紹介したり、地域の草の根的児童文化活動を支えている人たちを取り上げるなど、地道な活動が注目を浴びている。

児童文化研究所は五十四年に『所報』を創刊し、毎年、一回刊行している。内容は児童文化研究集会の分科会の研究記録を収録するほか、講演内容も掲載する。

また、五十三年秋に提示された児童文化研究推進計画により、所員の研究成果でまとめた論文を掲載するほか、研究分量の大きいものは児童文化研究所叢書として刊行している。五十五年九月、鈴木鳴海所長の『児童文化の性格と課題』が叢書の第一号として上梓された。